

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### サバ州で生まれるオランウータン孤児たち

田島知之 (京都大学大学院理学研究科研究員)



孤児が生み出した命も育てている (筆者撮影)

マレーシア・サバ州のセピロク・オランウータンリハビリテーションセンターは 1964 年に設立されたオランウータンの孤児院である。ここは、州内で発見されたオランウータン孤児を森へ返す目的を持つ。リハビリテーションプロセスの一部は公開されており、訪れる日本人もかなり多い。読者の中には実際に見に行かれた方も少なくないだろう。

滞在の間に閲覧した記録によれば、これまでに 750 頭以上のオランウータンが収容された。その多くが母と離ればなれになった赤ん坊だ。農地に出てきた子連れの雌が殺されると、赤ん坊はペットとして高値がつくため生かされることが多い。そうした孤児の多くは劣悪な環境で飼われたことで、栄養失調や下痢による脱水、感染症、寄生虫により衰弱している。保護された孤児はまず、検疫室で 2 週間の治療を受けてから他のオランウータンと共同生活を送ることとなる。

1～3 歳のうちは、インドア・ナーサリーと呼ばれる飼育室で夜間を過ごし、日中は屋外に設置されたアスレチック遊具で遊ばせる。オランウータンは生まれつき木登りの天才というわけではなく、森の生活に必要な体の使い方を学ばせる必要がある。

6 歳頃になるとアウトドア・ナーサリーと呼ばれる森林内にある施設に移される。日中は森で木登りをして仲間と遊び、夜になると屋内で眠る。森にすむ孤児院出身の「先輩」たちや野生のオランウータンが彼ら

を見物に来ることもあるので、孤児たちは森で生活する上での社会経験を積むこととなる。

6 歳を過ぎると、セピロクの森に放され、施設に戻されることはなくなる。できるだけ人間から離れて生活することが推奨されるが、すぐに自力で食べ物をとれるわけではない。孤児にとって最大の難関は自力で食物を得ることである。森の植物は毒を有する種類が多く、本来は母親の食事を観察しながら適切な食べ物を学ぶはずである。森林内には給餌台が設置され、バナナなどが与えられ、孤児の命をつないでいる。

その後、大人になった孤児の一部はよその森へ移送される。うっそうとしたジャングルの中、オランウータンを追跡するには膨大な人的・金銭的コストを要するため、森に放した後の追跡調査はほとんど行われていない。森に返された孤児たちの内、何割が生き残ったか、詳細は不明である。

孤児院出身の雌が森で子を産んで育てているものの、オランウータン孤児のリハビリテーション事業が大きな成功を収めているとは言いがたい。「無意味だ」という批判も外部から寄せられるそうだが、この事業がなければ農地で親を失った全ての孤児たちは死を免れられない。そして忘れてはいけないのは、こうした孤児たちを生み続けている最大の要因はサバ州で今日も続く森林伐採と農地開発であり、その産物の恩恵を受けているわれわれとオランウータン孤児が無関係ではないという事実であろう。

#### < 筆者紹介 >

1984 年、東京都生まれ。京都大学大学院理学研究科研究員および日本オランウータンリサーチセンター理事。理学博士 (京都大学)。2009 年よりマレーシア・サバ州でオランウータンの研究に従事している。主なテーマは、オランウータンの「弱い雄」がどのようにして子を残すのか、その戦術について。共著書として「はじめてのフィールドワーク 1 アジア・アフリカの哺乳類」(2016) 東海大学出版部。